

新相撲の発足と今後の課題  
—女相撲の歴史を踏まえて—

Present and Future of Shin-Sumo.  
—Reflecting on the History of Onna-Zumo—

下川隆司\*, ニツ森 修\*, 屋田 敏弘\*, 小山 泰文\*  
古谷 洋一\*, 佐藤 和裕\*\*, 下川 学\*\*\*, 下川 哲徳\*\*\*\*

Takashi SHIMOKAWA \*, Osamu FUTATSUMORI \*, Tosihiko OKUDA \*, Yasufumi KOYAMA \*  
Yoichi FURUYA \*, Kazuhiro SATO \*\*, Manabu SHIMOKAWA \*\*\* and Tetsunori SHIMOKAWA \*\*\*\*

ABSTRACT

In 1996 Shin-Sumo made a start in Japan as a new women's sport. Sumo is a traditional sport born and nurtured in Japanese culture. But Onna-Zumo (a Sumo contest between women wrestlers) has long been thought as only a sensational and rather obscene show, not a sport. We examined this perception, and the survey we conducted made it clear that women, like men had participated in Sumo with the same degree of seriousness in the Edo Era (1603–1867) and the Meiji Era (1868–1912). Today the Sumo which women participate in has come to be called Shin-Sumo and it has been admitted as an official sport. Many women have begun to on gage in Sumo And the first international competition of Shin-Sumo was held in Germany in 1999. Shin-Sumo still has not a few problems to be solved. First of all, the increase of number of Shin-Sumo participants and education of its leaders are urgently needed.

はじめに

平成8年(1996)4月、日本新相撲連盟が発足し、女性によるアマチュア相撲が新相撲という名称で正式にスタートした。翌年1月には新相撲初の全日本新相撲選手権大会が大阪市で開かれたが、目新しいこともあって、マスコミでもルールの紹介や大会結果などが大きく取り上げられ、まずは順調な滑り出しを見せた。

新相撲連盟では、新相撲をまったく新しいスポーツであると強調しているが、長い伝統を持つ相撲と決して無縁ではありえない。そこでまず、主

として我が国で長く続いてきた女相撲を歴史的にたどってみることにした。それから新相撲の発足の経緯と特色、さらに今後の課題などを検討してみた。

I 女相撲の歴史

1. 女相撲の興行

我が国で農耕が始まったとされる縄文時代後期から弥生時代にかけて、農作物の吉凶を神に占う農耕儀礼として、すでに相撲が行われていたと考えられている。各地の神社で今日も行われている

\* 国士館大学 (Kokushikan University)

\*\* 道都大学 (Dohto University)

\*\*\* 東京純心女子大学 (Tokyo Junshin Women's College)

\*\*\*\* 杏林大学 (Kyorin University)

「神事相撲」は、この流れをくむものといってい  
いだろう。

その後、奈良時代に入ると、相撲の節日に朝廷  
で天覧相撲が行われるようになり、「節会相撲」  
として定着するようになった。

鎌倉時代に入ると、相撲の主役も武家に移り、  
時の将軍による上覧相撲がしばしば行われた。こ  
れらの「武家相撲」は、戦国時代になると、儀式  
としての面が薄れ、武術のひとつとしてもはや  
されるようになり、強い力士は大名に召し抱えら  
れることもあった。

江戸時代には、土俵で相撲を取ることが一般化  
し、共通したルールを持つようになった。それに  
ともなって、相撲を職業とする相撲人の集団が数  
多く出現し、江戸・京都・大坂などで「勧進相撲」  
を行うようになった。

明治時代を迎えると、大相撲とアマチュア相撲  
とに分かれて、国技としての相撲の地位を確立す  
る中、それぞれが発展し、今日に至っている。し  
かし、裸体にまわしを締めて取る相撲は男性が行  
うものというのが一般的で、上に掲げた歴史的流  
れも、男性による相撲の歴史である。相撲の歴史  
に関する優れた研究書も数多く出版されているが、  
これらの研究書でも女性の相撲について触れた  
ものは、ほとんどない。<sup>1)</sup> いや、むしろ相撲の  
歴史というとき、すでに男性による相撲という前  
提がなされ、女性による相撲ははじめから 考察  
の対象となっていないのである。それでは、女性  
による相撲はぜんぜん行われてこなかったかとい  
うと、そうではない。

女性による相撲では、雄略天皇13年9月のとき  
に、雄略天皇が、「采女を喚し集へて、衣裙を脱  
ぎて、著犢鼻して、露なる所に相撲とらしむ」  
([日本書紀] 第14)<sup>2)</sup>

とした記述がよく知られている。この記述では、  
「相撲」という語が初めて使われており、しかも  
犢鼻はふんどしを指し、露なる所、すなわち人前  
で行ったというから、遊技の域を出たものだった  
と思われる。

鎌倉時代に書かれた『古今著聞集』には、節会  
相撲に出るため鎌倉に上る途中の武士を女が押さ  
えつけた話や、近江の遊女が高い足駄をはいたま  
ま暴れ馬のさし縄をつかんで静めた話など、力で  
男性に引けを取らない女性の逸話などが出ている。  
こうした女性の中に、相撲を見て自分も相撲  
を取りたいと心が逸った女性がいたとしても、少  
しも不思議ではない。女性が飛び入りで相撲を取  
った話はさまざまな書物に出て来るのである。

安土桃山時代に書かれた『義殘後覚』という書  
物にも、勧進相撲の興行に女性が飛び入りして男  
性力士を突き倒したという話が載っている。少し  
長くなるが、当時の相撲興行の様子をよく表して  
いるので、次に掲載しておく。

「京伏見繁昌せしかば、諸国より名誉の相撲  
ども到来しける程に、内野七本松にて勧進相撲  
張行 す。勧進本の取り手には立石、伏石、荒  
波、岩崎、反橋、(中略)、などを初めとして都  
合三十人ばかりありけり。寄り手には五畿内、  
さては諸国より集まり取りけれども、さすがに  
勧進相撲を取る程の者なれば、いずれも取り勝  
ちけり。寄り手の人々には口惜しきかな。いかな  
る人もあらば求めて取り合わせたく存ずれな  
ど議してある所に、ある日立石関にて出る時、  
行司申しけるは「御芝居に相撲は尽き申し候や。  
もし御望みの方御座候わば只今御出候え。左あ  
らば名乗り申し候」と呼ばはりければ、「出  
でむ」と云う人一人も無し。かかる所に鼠戸  
(ねずみと)より「暫く相撲を待ち給え。御望  
みの方御座候」と申す程に、行司「其の議なら  
ば早く御出候え」と申しければ、出にけり。  
人々、何たるいかめしき男ならむと見る所に、  
年 の頃二十許りなる比丘尼(びくに)なり。  
行司「こは異なる人こそ」と申しければ、比丘  
尼申しけるはさん候「我は熊野辺の者にて候が、  
常に若き殿原達の相撲を取らせ給うを見及び候  
に因て人々取らせ給うがうらやましさに参りて  
候。(中略)立石申しけるは「かようのへ弱な  
る者は十人も二十人もひとつまみずつにすべき

に、いかで某（それがし）おとなげなくも取るべきぞ。若き小相撲の候わんに合わせ給え」と云いければ、比丘尼聞いて「いやいや取る程ならば勸進本にて上相撲を出し給え。左なくば取るまじく」と申す。見物の貴賤これを聞いて「誠に面白し。立石取れ」と一同に所望しければ、力なく取りにける。さて比丘尼は帷子（かたびら）を脱ぎて出けるをみれば島かるさんをぞ着たりける。行司相撲を合わする時、立石大手を広げて「やっ」と云って構えければ、比丘尼つと入って仰けに突き倒しける。芝居中之を見てあきれ果てぞ褒めたりける。立石口惜しく思い、なめ過ぎて負けると思えば今度は小体に構えて、かかる所に、比丘尼つと寄りければ立石弓手のかいなを取りて三振りばかり振りければ、比丘尼は後臈（あとすね）を追っとりて俯しさまにぞ投げたりける。芝居中は時の声を作りて笑いける程にしばしは鳴りも止まざりけり。それよりも伏石貫木荒波など出て取れども、後は次第に比丘尼の投げ口は電光の如くにいか取るやらん。目にも見えず手にも溜めず取りたりける。かくて相撲はこの比丘尼に関を取られければ、芝居は則ち退散す」<sup>3)</sup>

江戸時代には、勸進相撲の隆盛に呼応して、女相撲の興行も流行するが、例外はあったにせよ、女相撲であっても、鄙猥な、あるいは単なる見せ物といったものではなく、男性による相撲の興行と変わらぬ取り組みが行われたと考えるべきであろう。なぜなら、この時代、男性による相撲の興行はしばしば乱闘や喧嘩を引き起こし、風紀を乱すものとして禁止令が出されたりした。

辻相撲辻おとり堅可停止若相背もの有之候はは捕之、急度可申付事<sup>4)</sup>

これは元禄3年（1690）に出された御触書だが、禁止令にもかかわらず辻相撲は盛んに行われたようで、同様のものはたびたび出されている。ここでいう辻相撲とは文字どおり道端で興行した相撲のことで、主として社寺の境内で行った勸進相撲

とは区別されるものである。こんな状況の中で、興味本位の見せ物としての女相撲が行われたというのは考えにくいからである。仮にそのような女相撲が行われたとしても、すぐに禁止されたことは想像に難くない。さらに、神事としての相撲も各地で受け継がれており、一般の人々は、相撲は神聖なものというイメージを抱き、「鄙猥な見せ物」として相撲を行うことに抵抗感を持ちあわせていたとも考えられる。

是からが女角力とぞ引くなり<sup>5)</sup>

これは江戸中期の安永9年（1780）、東京深川八幡で女相撲が行われたときに読まれた川柳だが、深川八幡は両国回向院に移る前の相撲興行場だったから、男性と同じ相撲興行場で女性の相撲も行われていたことを物語っている。誤解をおそれずに、女相撲を取り上げたこの時代の別の川柳も紹介しておこう。

ふんとしも女角力ハむつかしい ふんとしを喰切そうな女角力<sup>6)</sup>

しかし、この川柳をもって、女相撲は鄙猥なものだったというのは早計である。いつの時代にも、女相撲というだけで鄙猥なイメージを抱く人はいるものだからである。また、川柳そのものが、おもしろおかしく誇張するものだからでもある。とくに上記の川柳にいたっては、そうした貧弱なイメージを仲間内でもてあそぶために頭の中で作り上げたもので、女相撲の具体的なイメージはまったく浮かび上がってこない。

大坂の人で大の相撲好きだった上田秋成（1734～1809）は、その著『膽大小心録』で、

「女の山上参りの先達も、大坂に一人あつた。またないものか、千石船のせん頭のみしや。女すまふはきたない物しやあつた」<sup>7)</sup>

と、当時男性の領分と考えられていたもので女性が行っていたものをいくつか挙げているが、どうやら秋成は、この文章を読む限りでは女相撲は

好きでなかったようである。

しかし、秋成と同時代に著された『浪花見聞雑話』に女相撲の記述があり、そこには女相撲が一般の相撲と同じように行われたことが、よく示されている。

「明和5年夏の頃、道頓堀に女の角力有り、東西に大関関脇小結を分って、一ツの大関ははんがくと云ふ大女なり。其頃町々より素人の女、此角力場へ飛入に來りて、望にまかせて角力をとらせたり。ある時天満天神の前に小山屋と言ふ内の下女、大力にして此角力の場へ飛入に行きたりしが、彼大関はんがくを此女が投げ付けたり。此女廿二才にして、常に四斗俵を我が齒にくわへて振り廻して、肩へ上げ持ち行きし、強力の女なりし也と」<sup>8)</sup>

この時代は、女性が相撲の興行を見物できないという定めがあったことも、人々が相撲に対して一種特別な想念を抱いていたことを裏付けている。相撲見物から女性を締め出したのは、封建的あるいは儒教的な考え方から出ていると思われるが、その理由の背景には、現在でも大相撲の土俵には女性が上れないという考え方に似たものがあったように思われる。

「それでも、見世物としての女相撲があったのは事実だ」と、主張する人がいるかもしれない。私たちもそれを否定はしない。相撲に限らず格闘技は、男女を問わず、ある意味でセクシャルなものであり、興行師がそれに目をつけて、見世物として女相撲の興行を行ったとしても、不思議ではない。しかし、それら見世物として行われた興行を女相撲と呼んでいいのだろうか、この点は疑問である。むしろ、女相撲という名を借りて、見世物を行ったのではなかっただろうか。男の相撲と同様に興行された女相撲があったのだから、なおさらその感を深くするのである。

さて、女性が相撲を見物できるようになったのは、明治に入ってからである。それも、はじめは

初日が除かれるなど、今では想像もつかないほど女性の相撲見物には神経が払われていた。

「相撲の説 府下の相撲は従来勸進の故を以て、婦女の覧觀を許さざりしが、当暮場所、第2日目昨23日より、婦女の見物を随意とせりと、実に方今自主自由の權を賜うの際、角力に限りて、婦女を禁ずるの理あらざる筈、もっとも至当の事と云わん」

(明治5年11月24日 東京日日新聞)

「明日より両国回向院の大角力は、いよいよ相始りこのたびは初めより女も見られる事に定め、大入りでございましょう」

(明治10年12月8日 東京曙新聞)

女性が相撲を見物できるようになって相撲も大衆化したのが、それはあくまでも大相撲のことで、見世物としての相撲は禁止されていた。このことは、江戸時代に辻相撲が禁止されたことと通じるものがあるといえよう。

「或は云う、男女の相撲裸体、袒裼、半腕半脛を露わす等は、違式註違の御例に処せらるるを、角力のみ依然として裸体也と、説喋々論紛々たり」

(明治5年11月24日 東京日日新聞)

ここに言われている違式註違の御例とは、当時明治政府より公布された禁止条例の中の、

「男女相撲並蛇遣ヒ其他醜態ヲ見世物ニ出ス者」という違式例を指している。

この違式註違の例について、文字どおりに解釈して、当時の男女の相撲があまりに醜態だったとするのは、事実を見誤ることになるので注意したい。むしろ排仏毀釈などに見られるように、大きな価値の転換期にあったことを頭に入れて解釈しなければならない。つまり、近代化を急ぐ明治政府にとって、近代化にとって都合の悪いことや西欧への外聞というものに非常に神経をとがらせていた時期であり、男女の相撲も、その内容いかんというより、裸になることをもって一様に禁止された面が強いと考えるべきである。そうでないと、この禁止条例にもかかわらず依然として女相撲の

興行が行われていたことが理解できなくなる。この条例の後、ほどなく出された「清国在留日本国民心得方規則」を見ると、

第6条

一市中往来筋ニ於テ猥リニ大小便ス可ラザル事

第7条

一裸体又ハ袒裼シ或ハ股脚ヲ露ハシ醜態ヲ為ス可ラザル事

第8条

一身体へ刺繍ヲ為ス可ラザル事

となっており、件の禁止事項はその後、第9条に、

一男女相撲並蛇遣ヒ其他醜態ヲ見世物ニ出ス可ラザル事

と出ており、さらに、

第10条

一婦人ニテ謂レナク断髪ス可ラザル事<sup>9)</sup>

などと続くのを見ても、ことさら男女の相撲の禁止だけが突出していたわけではないことがわかるのである。

明治政府の意向にもかかわらず女相撲の興行は行われていたのは確かで、次に掲載したのは、女相撲の興行で女性の力士が拘引されたことを伝えている新聞記事である。

「数百年来の習慣とはいえ、力士が裸体のまま両々相当るは、文明の今日に在りて恥ずべき事柄などという人も多き中に、婦女の身にしてあられもなき、観衆の前をも憚らず男力士のごとくに、一条の厚き犢鼻褌を締め込み、島田髷の娘の打扮にて四つに取り組み、大なる乳房を左右に振り分け力を角するなどとは、実に興の醒めたる話なるが、客月中のこととかや、越後高田に於いて右の女相撲を興行せしに、奇を好む人情として、観客所狭きまでに押し掛け、力の強弱は後の手に廻して、容姿の醜美を評するもありしとか。しかるに同月28日、右女相撲の一人はる（22年）といえるは、突然その筋へ拘引されたり」

（明治20年10月12日 時事新聞）

なぜはる一人だけが拘引されたか、疑問の残るところであるが、はるのことを「同人は…某の妻にて二人の小児さえ設けたる者なるに、先頃同町に於いて女相撲の興行ありし時、見物に出掛け、何が面白かりしにや右の仲間に参加し、…」と、同新聞は伝えており、振る舞いが目に余ったはるを除いて他の女性の力士は大目に見られたようである。

その後、女相撲の興行の禁止令は緩和されたようで、女相撲の興行団が両国回向院で興行を行った際は、一行が歓迎されたほどである。

「両国回向院前の坊主鶏肉屋にて、一昨日女相撲一同へ鶏肉に大判（ママ）振舞いをなせし事は、前号に記載せしが、その際主人は女相撲なればとて、飲食物に注意を加え、一通りの出し物の外に、小判形半台に堆く盛り上げた鶏肉7枚を出し、充分に勧めしも、彼等は出京始めての饗応なれば、多少遠慮なせる様子なりしに、……」

（明治23年11月19日 読売新聞）

同新聞は前号で、「普通角力と同様なるぞ」と書いて、この興行団が大相撲興行の行われていた両国回向院で、大相撲と同様の作法・取組を行ったことも伝えている。

平井通氏の『おんなすもう—見世物女角力志—』<sup>10)</sup>によると、この時の興行は、信州の興行師、斉藤祐義という人物が、山形地方で女相撲を実見して人気のあることを知ったので、自分の女房きん、妹のきわ、もとの3人に相撲を教えて、さらに力のある女性を加えて、明治19年（1886）から、秋田、青森、北海道で巡業しているときに、東京の興行師に買われて、回向院境内で興行を行うことになったという。

ここにある山形地方の女相撲の興行は、興行師の一人であった石山兵四郎という人物が中心となって行っていたもので、石山は昭和5年（1930）、25名の女力士を引き連れてハワイ巡業まで行っている。洋行が難しかった当時を考え合わせると、石山が女相撲の興行にかかるエネルギーは並々な

らぬものがあつたといえよう。

新聞はこのときの様子を、「風変りな渡米客女相撲団や武者修業を乗せて 春洋丸出帆」という見出しで、次のように報じている。

「郵船春洋丸は20日午後3時横浜出帆ホノルルへ向つたが同船には、……18歳で25貫の大関秋田生れの戸塚きく子を隊長とする女相撲団一行25名など風変りの日本名物を乗せて行つた」

(昭和5年6月21日 朝日新聞)

戦後になつても石山の女相撲への興行意欲は衰えることなく、「日本唯一・石山女大相撲」と称して、東京の各地で興行を行つた。多数の女性力士を抱え、その興行に専念した石山の名は、明治以降の女相撲で特別異彩を放っている。

しかし、戦後の経済発展とともに娯楽が多様化し、女相撲の興行はその流れに順応することができず、消えていったのであつた。

## 2. 郷土芸能・神事としての女相撲

郷土芸能、あるいは神事としての女相撲も、さまざまな地方で行われている。次の例は、長崎県大村市北部の八幡神社例祭に関する記述である。

「中でも‘角力女踊り’の出し物は、大道芸能的内容をもち、相撲甚句を中心に土俵入りなどを披露する。特に土俵入りは、一連の相撲興行的スタイルによく組み立てられていて参観者の人気も高い。角力踊りは、ノボリを先頭に→太鼓→呼出し→行司→女力士の順に土俵に上がり演技がある。部屋の名前やシコ名を面白く紹介し、露払い、太刀持ちを従えての土俵入りは圧巻。時には実際の取り組みもある」<sup>11)</sup>

このような郷土芸能の色彩を持った女相撲は、他の地域でも行われており、特に長崎県やその周辺が盛んで、内容も、相撲甚句を唄い相撲踊りを披露するなど、上記の八幡神社の女相撲とよく似ている。

「エー 鶴と亀との 夫婦げんかが で一け

たよ一鶴よお前に 暇をやる なぜにいとまと言わんすか 首の長いが おきらいか (下略)」

(長崎市式見町に伝わる女角力甚句)

「竹辺にでけた 角力取は 春の眺めは 嵐山 心も勇む 若勇み 緑変わらぬ 千代の松アー ながく伝えて 君が代の (下略)」

(佐世保市竹辺町に伝わる女角力踊唄)

「揃たヤーエ 揃いました関取さんが揃うた トコドスコイ ドスコイ 船が三艘走り込み 先なる船のお荷物は 金と小判を積んで来て 中なる船のお荷物は 綾と錦を帆にまいて 後なる船のお荷物は (下略)」

(佐賀県下の角力甚句)

以上の3つの角力甚句や唄はいずれも、『日本民謡大辞典』<sup>12)</sup>に掲載されているもので、女性が帯に座布団を挟んでにわか関取の格好などをして土俵入りや弓取りをしながら歌う。同書によると、佐賀県下の角力取踊について、近世中期以降、農村のレクリエーションのために生まれた芸能としたうえで、「踊の服装は股引に丸首シャツ、その上に化粧まわしをつけ、総勢20～30人の婦人たちが輪をつくって踊る。歌い手は輪外で歌い、囃子の部分を全員で歌う。家の落成式などで地を固めるなどして踊られている」という。

神事としての女相撲に関しては、

『日本国語大辞典』(小学館刊)に、「日照り続きの雨乞いのために女相撲をする風習は、各地に点在する」とあり、それほど珍しいことではないようであるが、灌漑整備の進んだ今日では、このような風習はほとんど見られなくなった。

ところで、雨乞いと女相撲を行うことが、どのように結びつくのであろうか。

女相撲ではないが、和歌山県由良町で行われる衣奈祭では、この日のために潔斎をして身を清めた少年がまわしを締めて、神前で一人相撲を取る。相手は神様で、しばらく神様と相撲を取って最後は引き分けに終わるが、それによって神様の機嫌

を取り豊作を祈るのである。同様な一人相撲は他の地域でも行われているが、その多くは1勝2敗や全敗となって、神様の機嫌をもっとあからさまに取るのが普通である。ここでは、あたかも人間と同じように喜怒哀楽を持った神様というものが想定されているのである。その神様を喜ばせ豊作にしてもらおうと、神様相手に相撲を取るわけである。

こうした例を見ると、神事としての女相撲も、神様の機嫌を取り雨を降らせてもらおうとしたのではないかと考えることができるのではないだろうか。<sup>13)</sup> 普段は行わない女相撲を特別に神前で行うことによって、日照りという異常事態を乗り越えようとしたのである。これはどこか、天照大神が天岩屋に隠れて日が差さなくなったため、天鈿女命(あまのうずめのみこと)が天岩戸の前で裸で踊って、再び光が戻ったという記紀神話を連想させるものがある。いずれにしても、男性が取るにせよ女性が取るにせよ、凶作を回避し、豊作を祈るために行われてきた神前相撲が、我が国で農耕が始まったときから、連綿と続いてきたのである。

しかし、郷土芸能や神事としての女相撲も、時代の趨勢にあわなくなったためか、現代に受け継がれ、定期的に行われるようなものは、ほとんどなくなってしまった。

現在、女性による相撲が定期的に行われているものとして、北海道弟子屈町の「全道女相撲選手権大会」と、同じく北海道福島町の「南北海道・女だけの相撲大会」とがある。この二つの大会はともに、女性が土俵に上がりトーナメントで優勝を争うというもので、新相撲に通じるものがあるが、これについての解説は、別の機会に譲りたい。

## Ⅱ. 新相撲の発足

### 1. 新相撲はどう受け止められたか

さて、女相撲がどのような受け止め方をされたかを交えて、女相撲の歴史を見てきたが、それを踏まえて、つぎに新相撲の発足時に、一般の人た

ちが新相撲をどのように見たかを、新聞の紹介記事を参考に見てみたい。

どの新聞も一番注目したのは、レオタードに相撲パンツという着衣で、「おしゃれなまわしパンツ」(平成8年3月3日付読売新聞)、「レオタードの上から相撲パンツ」(平成9年1月20日付毎日新聞)、「派手なレオタードに太いベルト」(サンケイ新聞95.9.3)、「レオタード'女相撲!」(平成7年9月3日付読売新聞)「レオタード姿でシコ踏んじゃった」(平成10年4月20日付サンケイ新聞)などの見出しがおどっている。

相撲といえば、裸体にまわしのイメージを想像するので、新相撲の着衣に注目がいくのは当然であろう。しかも、新相撲連盟が考案したレオタードはカラフルで、従来の格闘技に見られない「おしゃれ」の要素を持っており、この点では、新相撲連盟の狙いはひとまず功を奏したといえよう。連盟から提供された、二人の選手がレオタードを身につけにっこり微笑んだ(とても格闘技の選手と思えぬエレガントあふれる)写真を載せた新聞もあった。(図1)



図1 新相撲選手のユニフォーム

新聞記事の内容を見ると、ルールは相撲と大きく変わらないが、「頭から胸に当たるぶちかましは禁じ手」(平成7年9月3日付読売新聞)とい

ったように、表現は違うが、みな一様に新相撲のルールを紹介している。また、マットの土俵も新相撲の大きな特色であることから、これについて触れた新聞もいくつも見られた。さらに、平成7年9月3日付の朝日新聞の記事は、相撲連盟が行った新相撲の発表会を「『女相撲イコールきわ物の誤解を解くために』が発表会の狙い」とした上で、実際の新相撲の競技を見て、「きわ物扱いしているのは、どうやら男性の方だけのようだ」と、率直な観戦記を載せていた。

女子の相撲というと、ややもすると「見せ物」や「ショー」といった色眼鏡で見られがちだが、新聞による新相撲の紹介記事を見るかぎり、新しいスポーツとして取り上げようという姿勢が窺われた。これには、競技の名称を新相撲とするなど、きわ物とは無縁の純粋なスポーツ競技であることを理解してほしいという、相撲連盟の強い意向が実ったといえよう。

## 2. 日本新相撲連盟の発足

平成3年(1991)、世界から25カ国が参加して国際相撲連盟が発足した。その後、加盟国が増え、平成11年(1999)には、82カ国が加盟している。相撲は日本独自のものという印象が強かったが、今や世界の相撲になったわけである。こうした世界各国の相撲熱の高まりとともに、相撲をオリンピックの新しい競技種目に加えてもらおうという声も高まった。2008年のオリンピック開催地の招致に大阪市が立候補していることも、この動きに拍車をかけることになった。オリンピックの新種目に名乗りを上げている競技はほかにも数多くあるが、大阪が開催地となれば、開催地の枠がいくつか割り当てられることが予想され、またとない機会になるからである。しかし、オリンピック種目に正式に参加するには、原則として男女の競技であることが条件となる。そのため、女子が行う相撲競技として、新相撲が興されることになった。

「相撲といえば男のスポーツというイメージが強いだけに、何故ここで女子相撲か、という

声もあるが、基本的には2008年のオリンピックに正式種目として入るということが大前提にある」

(佐藤功日本相撲連盟専務理事「相撲の現状と将来展望」、『武道』平成8年7月号)

同氏によると、新相撲の構想が持ち上がったのは平成2年(1990)であったというから、国際相撲連盟の発足前にすでに話が持ち上がっていたことになる。オリンピックに新種目として採用されるまで、20年~30年かかるのが当たり前となっていることを考えると、新相撲の構想はそれでも遅いくらいであったといえよう。

平成4年(1992)から具体的な準備に入った。しかし、当時はまだ、

「何故ここで新相撲を作らなければならないのかとお叱りを受けたり、また大いにやれという励ましの言葉を頂いておりますが、基本的には、今後男子だけのスポーツではオリンピックには入れません」

(平成8年度日本相撲連盟事業計画より)

と、新相撲の新設に賛否両論があったが、オリンピックへの参加を最優先し、準備が進められた。

平成7年(1995)9月2日、東京新宿のホテル海洋で新相撲がはじめて披露され、マットの土俵でレオタードを身に着けた選手が、多くの報道陣を前に模範演技を行った。ちょうどこの日は、日本相撲連盟創立50周年の記念祝賀会に当たり、同連盟が新相撲の普及を全面的に支援することから、祝賀会の席で披露されたのであった。

翌年の平成8年(1996)4月28日には、大阪国際交流センターで日本新相撲連盟の発会式が開かれ、新相撲が正式に活動することになった。理事長には北田登男氏が就任した。新相撲では、連盟事務局が大阪市に置かれ、一番大きな大会である全日本新相撲選手権大会も大阪で開かれているが、これは、大阪オリンピックの実現を期待するとともに、大阪市が学生相撲の発祥の地であることなどからである。

オリンピック種目への参加を働きかけるため同



年4月、国際相撲連盟の田中英寿事務総長がスイスにサマランチIOC会長を訪問した。その席上、サマランチ会長から予想どおり、

「女子はどうなっているか」

と質問されたが、準備の甲斐があって、田中事務総長は、

「本年度（1996）から正式に始まります」

と答えることができた。（『武道』平成8年8月号）

現時点ではまだ参加できるかどうかの結論は出ていないが、新相撲の発足によって、少なくとも相撲をオリンピックの種目とするかどうか、検討される見通しとなったのである。

ところで、単に相撲をオリンピックの種目に参加させたいということだけで、新相撲を興すことができるかという点、この点にはなほ疑問である。強引に選手を募り競技を行っても、それは一過性のものであり、スポーツとして根づかないからである。

しかし、新相撲の誕生には幸い、一過性のものに終わらせない様々な要因があった。その一つが、前に見たように、我が国には女性による相撲が、男性による相撲と同じように古くから行われていたということがある。

また、近年、女性の社会進出が著しくなったことも、大きな要因のひとつである。江戸時代、女性は相撲の観戦すら許されていなかったが、その理由が表向き、相撲は男性の神聖な取組だとしても、内実は、女性が格闘技のようなものにうつつを抜かしてはならないという封建的な考えから出たものと思われる。しかし、今日では、女性が格闘技に「うつつを抜かしても」、とりわけそれが女性だからといって、おかしい目で見られることもなくなった。いや、それどころか、見るだけでは飽き足らなくなった女性が、自ら格闘技に参加しても、別段特別視されることもない。私たちの学校の新相撲の選手も、「国技である相撲を実際に経験できてうれしかった」と、自ら相撲をとった喜びを素直に語っている。

柔道では、創始者の嘉納治五郎は、女性が柔道を行うことは許しても、試合は禁じていた。我が国で女性が柔道の試合を行うようになったのは、昭和53年からである（表1）。女性の柔道選手が世界を舞台に活躍しているのを目の当たりにしている今の人たちから見ると、むしろ試合を禁じていたことに驚きを感じるのではないだろうか。柔道だけではない。レスリングに取り組む女性たちも増えている。女子プロレスでは多くの同性たちも熱狂する試合が繰り広げられているが、健康や美容のためにと気軽にレスリングのトレーニングに励むごく「ふつう」の女性も多くなった。さらに、今年（平成11年）4月には女子プロボクシングも始まり、リングでは男性に劣らぬ激しい戦いがファンを沸かしている。その進展ぶりは目をみはるものがあり、同年10月には初代女子プロボクシングチャンピオンが誕生している。

直接的には、相撲競技のオリンピック参加という狙いがあったにせよ、こうした女性の格闘技熱の高まりが追い風となって、新相撲は誕生したのである。オリンピックの種目に加えられるかどうかは、まだ未定であるが、将来的には、

「女性に門戸を開くことでアマ相撲全体に活気が出てくる」（田中英寿日本相撲連盟専務理事）と、新相撲の誕生によって、相撲界全体の活性化

表1 女子柔道のあゆみ

明治26年(1893)	嘉納治五郎らによって女子への柔道の指導が始まる。
大正15年(1926)	講道館で女子柔道講習会が開かれる。講道館女子部開設。
昭和8年(1933)	小崎甲子が女子初の初段者となる。
昭和49年(1974)	オセアニアで初の女子選手権大会が開かれる。翌年、ヨーロッパ女子選手権大会開催。
昭和53年(1978)	我が国初の全日本女子選手権大会(体重別)開催。
昭和55年(1980)	国際柔道連盟がニューヨークで第1回世界女子選手権開催。
平成4年(1992)	バルセロナオリンピックから女子柔道がオリンピックの正式種目となる。

が期待されている。

### Ⅲ 新相撲のルール

後述するように、相撲とほとんど同じルールで競技が行われる新相撲は、我が国で長い伝統を持つ相撲の流れを汲んでいるのは言うまでもない。しかし、その半面、従来の相撲とは一線を画する面も持っている。女性による競技なのだから、同じ格闘技である女子柔道や女子レスリングのように、女子相撲という名称が一般的だと思われるが、あえて新相撲という名称を唱えた大きな理由もそこにあり、国技として発展してきた我が国の伝統的な相撲とは一線を画し、女性による新しいスポーツであるとの考え方によるものであった。

これは単なる名称の問題ではなく、選手がレオタードを身に付けることやウレタンの土俵を使うことが考案され、違和感なく受け入れられるのも、新相撲という名称と密接に結びついていると言っている。カラー柔道衣をめぐる、伝統と新しい流れの中で揺れ動いている日本の柔道界を見ると、このことはいっそう理解されてくる。

「競技場は室内でマット土俵を使用し、服装も男子と違い‘まわし’を表に出すのではなく、レオタードの中にまわし様の帯を入れるなど試行錯誤を繰り返しながら選手の声聞いて改良を加えていきたい」

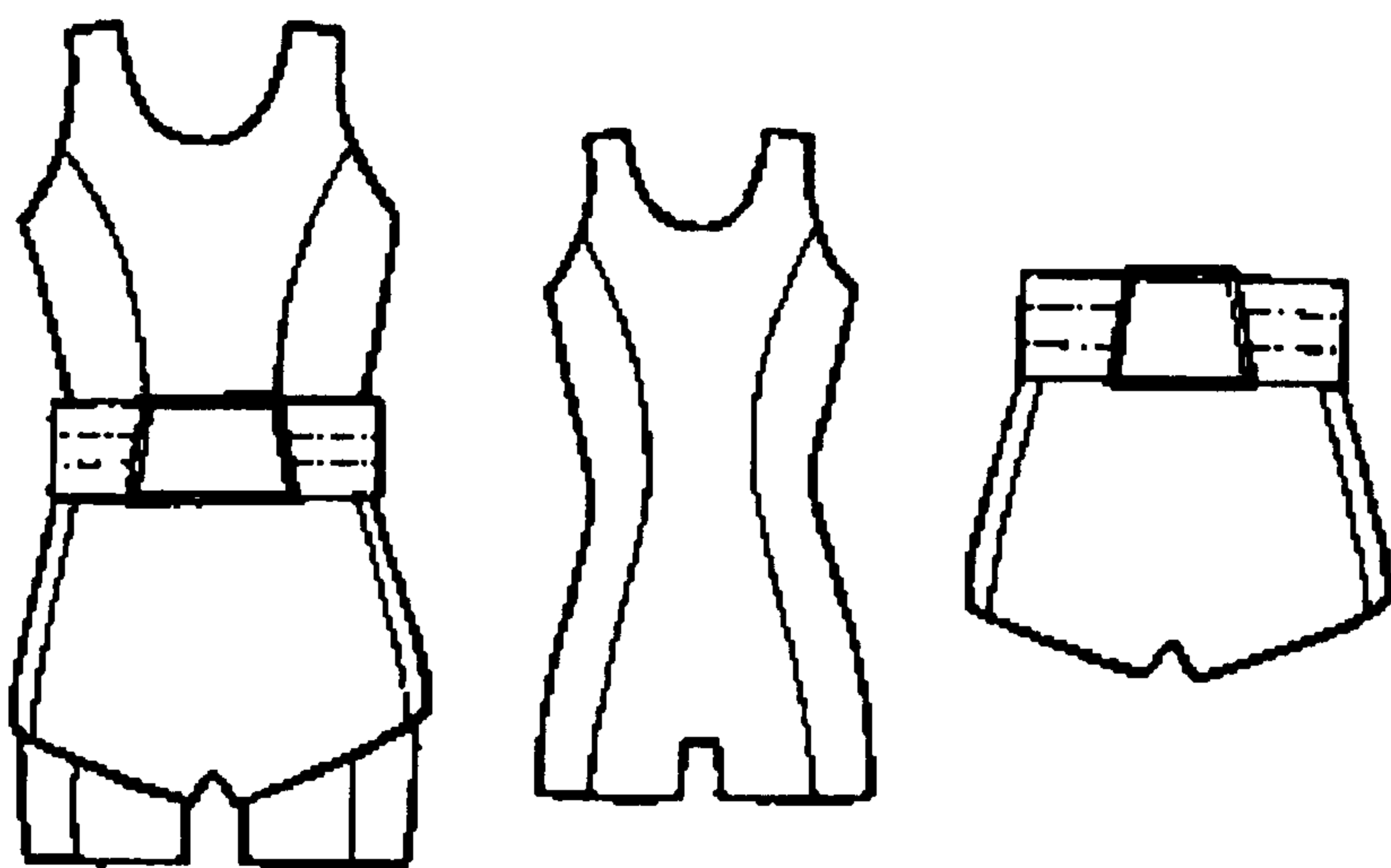


図2 新相撲の着衣

(佐藤功日本相撲連盟専務理事、『武道』平成8年7月号)

と、新相撲が発足したばかりのころ言われたが、ここからも、伝統よりも現代感覚を重視しているという姿勢がうかがえる。

新相撲の大きな特色の一つは服装で、新相撲の選手は、レオタードにまわしのついた相撲パンツを着用することになっている(図2)。また、競技会では、新相撲章(図3)入りの日本新相撲連盟の指定するものに限るとされている。レオタードは格闘技を行う女性の特徴から考案されたもので、互いに思う存分力を発揮するのにふさわしい服装となっている。しかも、レオタードの上に着用する相撲パンツにはまわしが固定されているので、乱れる心配もない。固定されているので、た



図3 新相撲章

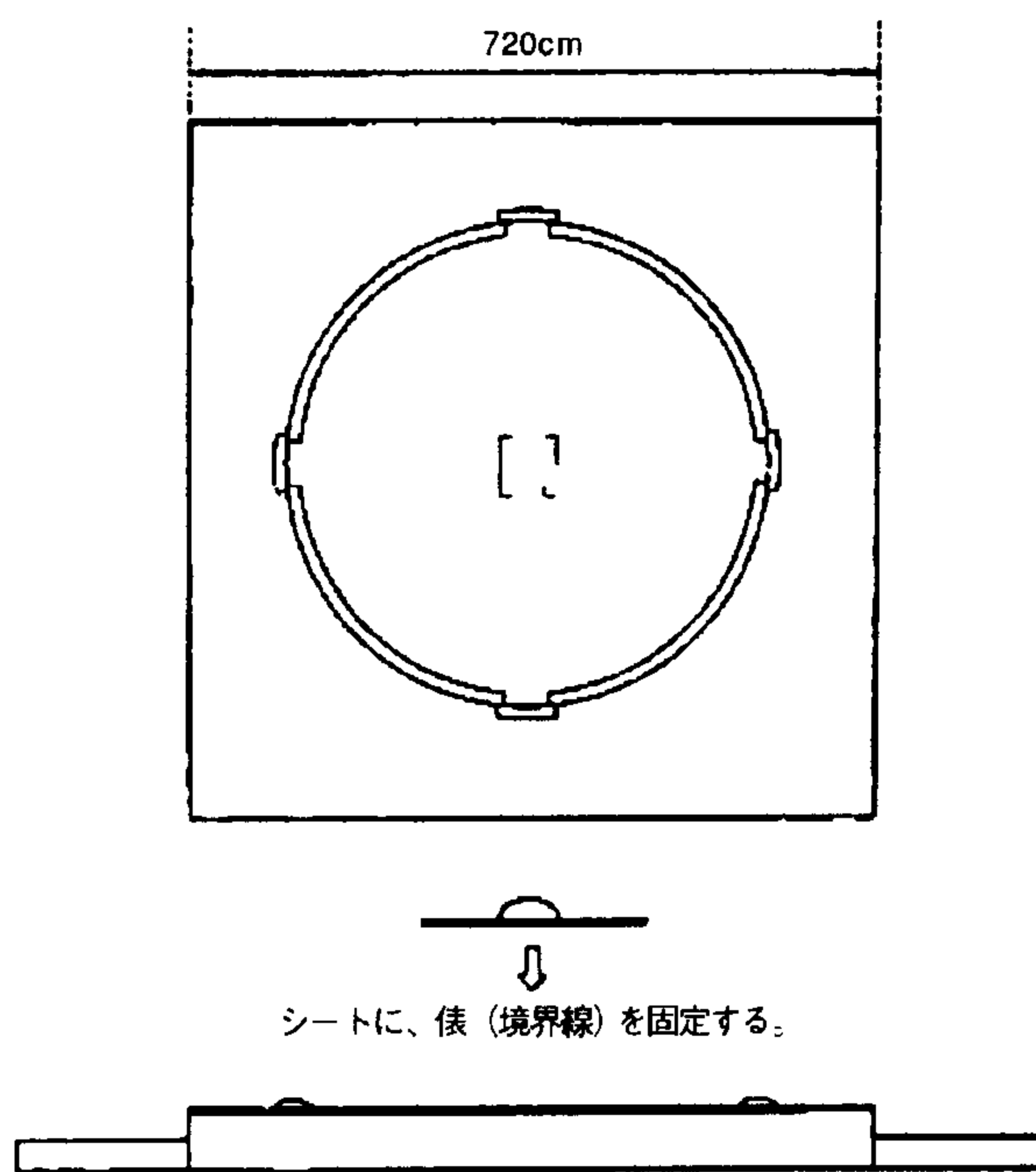


図4 新相撲の土俵

てみつも不要となり（実際は縦の帯がパンツの内側に入っている）、‘ふんどし’というイメージはまったくない。「陸上のユニホームや水泳の水着を研究しながら、まわしとパンツを合体させた新相撲パンツを開発。まわしの強さを保ち、いかにカッコよく見せるかに配慮した苦心作」と、新相撲連盟では胸を張っている。

もう一つ、新相撲の大きな特色が土俵である（図4）。「財団法人日本相撲連盟土俵標準規格に準ずる。ただし、相撲場に使用する材質等は別に定める」（「日本新相撲連盟競技会規定」より）。

この規定のとおり、新相撲の土俵は俵や徳俵があり、大きさ（内径）も一般の土俵と変わらないが、土俵の材質は土ではなく、発泡スチロールやウレタンが使われている。土俵全体の高さも6cm～12cmと、土俵下に敷いた発泡スチロールの厚さだけ、床から高くなっているだけである。この土俵を使うことによって怪我の心配も減少し、室内でも容易に競技できるようになっている。

競技のルールは相撲とまったく同じで、決まり手は「外襷反り」と「撞木反り」を除いた70手があり、女性でもダイナミックでスピード感あふれる相撲の醍醐味を味わうことができる。ただし、危険予防のため、「張り手」「突くこと」「つかむこと（頭髪・のど及びまわし以外の着衣）」「蹴ること」「逆指」「咬むこと」は禁じ手とされている。これらの禁じ手は、男性の相撲（アマチュア）とまったく同じだが、発足当初は、さらに「立合いの頭突き（ぶちかまし）」が禁じ手として加えられていた。しかし、平成9年（1997）に初の全日本新相撲選手権大会を行った結果、ことさら新相撲だけにこの禁じ手を加える必要がないということになり、現在ではまったく相撲と同じルールで行われている。

仕切りから立ち合いの流れは、

蹲踞姿勢→立ち上がる→腰を下ろす→両手を両ひざの上に置き腰を定める→左（右）の手を下ろし、次に右（左）の手をついて立ち上がる→運び足（すり足）

となるが、特に立ち合いでは両手を始めからしっかりとついて、行司の「ハッケヨイ」の掛け声で対戦することが、相撲とやや異なるところである。

競技は団体戦と個人戦があり、ともに体重別で行われる（表2）。

新相撲に体重制を取り入れたことにより、選手は無理にふとる必要はなくなったわけである。また、「体重制でなければ試合にならない」という選手の声もある。女性選手の拡大には、この点は大きいと言える。ボクシングやレスリングのジムに通う女性の中には、ダイエットをその目的のひとつにしている女性も多い。それほど現代の女性は太ることを極端に嫌う傾向があり、太って強くなるという従来の相撲の考え方は、こと女性には通用しない。ただし、新相撲の基本練習は従来の相撲と変わらず、「四股」「伸脚」「開脚」「運び足」「調体（鉄砲）」などを行う。

表2 新相撲の競技

〔種目〕	団体戦及び個人戦の2種目とし、体重別制とする。
	ただし、上位の階級で出場することができる。
〔方法〕	リーグ戦方式またはトーナメント戦方式とする。
〔選手〕	団体戦は、3人制とする。 選手編成は、 ①先鋒（55kg未満） ②中堅（70kg未満） ③大将（無差別）
	個人戦は、4階級とする。 ①軽量級（55kg未満） ②中量級（70kg未満） ③重量級（70kg以上） ④無差別級
〔計量〕	計量は、競技会当日、レオタード姿で行う。 ※小学校または中学校の競技については別に定める。

#### IV 競技としての新相撲

女性の特性に配慮したルールを持った新相撲が誕生した経過を見てきたが、実際に試合がどのようにすすめられたか、平成9年から始まった全日

本選手権大会を見てみることにしよう。

・第1回全日本新相撲選手権大会

第1回全日本新相撲選手権大会は、平成9年1月19日、大阪市中央区のツイン21ギャラリーで開かれた。土俵の設けられた会場は、より多くの人に見てもらおうと1階のオープンスペースが利用された。このときの参加者は、14歳の中学生から46歳の主婦までの34人で、選手たちは軽量級・中量級・重量級・無差別級の4階級に分かれて、初代チャンピオンを目指した。観戦者は約3000人に上り、盛大な応援が選手にも通じて、白熱した試合が展開された。女性でもファイトあふれる試合が見られ、なんら男性と遜色ないことから、この大会では禁じ手とされていた「立合いの頭突き(ぶちかまし)」が廃止され、以後相撲とまったく同じルールで行われることになったほどであった。上位の成績を残した選手を見ると、柔道から新相撲にまわった選手が多かったが、ルールが簡単なので他の競技からも参加しやすいことから、この結果は新相撲の発足当初より予想されていたことでもあった。参加者の中には、オリンピックに出場して金メダルと取りたいと意欲を燃やす選手もあり、新相撲の魅力を十分にアピールすることのできた初の全日本新相撲選手権大会であった。

表3 全日本新相撲選手権大会の各階級の参加選手の数(人)

	第1回	第2回	第3回
軽量級	16	17	15
中量級	12	15	15
重量級	4	7	7
無差別級	5	6	6
合計	37	45	43

・第2回全日本新相撲選手権大会

第2回全日本新相撲選手権大会は、平成10年1月18日、大阪市舞洲アリーナで開かれた。この大会では、前回は上回る43人が参加し、4階級の個人戦で熱戦を繰り広げた。この大会で注目されたのは、ソウル五輪の柔道で金メダルを取った山田光が中量級で優勝したこと、また、前回優勝できなかった選手が今大会の優勝を目指して練習を重ね、その成果を出した選手が2人いたことだった。

・第3回全日本新相撲選手権大会

第3回全日本新相撲選手権大会は、平成11年1月17日、大阪市中央体育館で開かれた。

この大会の参加者は39人だった。注目されたのは、無差別級で第1回大会から連続優勝している築比地里絵選手が、無傷の3連勝を飾ったことだった。国内では敵なしの状況だが、同選手は今年(平成11年)12月にドイツのリーザ市で行われる

新相撲の国際大会に出場することになっており、そこで真の実力がためされることになっている。また、第2回大会で出場選手が増えたため、この大会でも増加が期待されたが、前回は下回る結果となり、新相撲の普及・拡大に課題を残した。

全般的には、まだ十分新相撲という競技の特性や技術を身に付けていない出場選手もあり、選手

表4 第1回～第3回までの全日本新相撲選手権大会の決勝戦の結果(左が勝った選手)

●第1回大会		
[軽量級] 小堀佳容子 (拓殖大学)	はたきこみ	望月加奈子 (常葉学園橘中)
[中量級] 安達裕子 (出雲西高校)	寄り切り	関根奈緒子 (拓殖大学)
[重量級] 水谷有希 (拓殖大学)	すくい投げ	小川奈巳 (拓殖大学)
[無差別級] 築比地里絵 (拓殖大学)	押し出し	梅川つぐみ (社会人)
●第2回大会		
[軽量級] 金沢智恵子 (浪速短大)	うっちゃり	小堀佳容子 (拓殖大学)
[中量級] 山田光 (社会人)	寄り倒し	岡田安澄 (亜細亜大学)
[重量級] 浅井栄美 (椋山女学園高)	突き落とし	森裕美子 (社会人)
[無差別級] 築比地里絵 (拓殖大学)	押し倒し	山田孝恵 (社会人)
●第3回大会		
[軽量級] 堺千陽 (拓殖大学)	寄り切り	大田あゆみ (出雲西高校)
[中量級] 石谷里美 (静岡商高)	突き落とし	河合恵利子 (社会人)
[重量級] 鈴木なつ未 (拓殖大学)	寄り倒し	浅井栄美 (椋山女学園高)
[無差別級] 築比地里絵 (拓殖大学)	押し倒し	斉藤とく子 (社会人)

自身に対しても新しい競技を理解してもらい難しさを浮き彫りにした。

相撲では前へ出て積極的に攻めるのが基本だが、それをしっかり身につけていなかためか、四つに組んだまま試合時間が長くなる傾向があった。また、土俵際まで攻められ負けが確定となった場合、男子ならば力を抜くところが、女子の場合は、負けまいと最後まで力を抜かず、そのため、怪我が心配されたりした。

競技では団体戦も定められているが、出場選手が十分揃わないことから、まだ開催する段階に至っていない。新相撲連盟では「近い将来、この大会で団体戦が開催できるよう、普及に努めていきたい」（北田登男理事長の話）としている。

第2回大会からは、5年生と6年生の小学生の大会も併催している。青年会議所などが各地で開催しているわんぱく相撲には、大勢の小学生の女子も参加しているので、こうした子供たちにも大きな大会への参加の機会をもってもらおうと開催することになったもので、付添の親の声援を受け、一般の選手に劣らぬ闘志あふれる試合が見られた。

## V 新相撲の現状

### 1. 選手の数

新相撲の選手の登録については、その年の全日本新相撲選手権大会に出場する選手が前もって登録する方法が取られており（単年度登録）、平成11年度の大会の登録選手は、中学生以上が88人、小学生が18人であった。第1回、第2回大会では各50人ほどの登録だったので、第1回から第3回までで、延べ登録人数はおよそ200人ということになる。

しかし、これまで秋田県や山形県、鹿児島県などで、新相撲の地方大会が開かれており、新相撲連盟に登録された正式な選手でない女性も大勢参加している。これらの大会は、新相撲の普及に熱心なその地域の人々が開いているものだが、新相

撲連盟でも後援団体となるなど、積極的に支援している。こうした地方大会の拡大が、正式な登録選手の数として数字の上では確認できないが、確実に新相撲の選手の数の増加につながっている。

### 2. 学校での取組、活動

現在のところ、大学・高校を通じて、新相撲に取り組んでいる学校はまだ出ていない。全日本新相撲選手権大会に併催される小学生の大会でも、種々の理由から、親の承諾書を取り、個人の資格で参加してもらっているというのが現状である。

新相撲連盟では、新相撲を高校に普及させるため、高体連相撲専門部会に働きかけているが、目下のところ、青森県高体連で前向きに取り組むという話が出ている程度である。しかし、近い将来、新相撲が国体の種目に入ることが確実視されており、そうなれば、学校単位の取り組みも一気に進むものと期待されている。

### 3. 海外の現状

海外に目を移すと、新相撲が盛んなのは、フランス、イギリス、ドイツなどのヨーロッパ地域である。これらの地域では、柔道や空手、相撲など、全般的に格闘技が盛んな地域でもある。

海外では、新相撲の選手もレオタードの上から男性と同じまわしを巻き、土の土俵で練習や試合を行うことが多く、あくまでも本来の形で相撲競技を行いたいという気持ちが強いようである。そうすると、問題になるのは国際大会など外国選手との試合だが、当面、この原稿を書いている時点から2ヵ月後に迫った今年12月、ドイツのリーザ市で開かれる初の国際大会が、どのように行われるかが注目される。

この大会は、第8回世界相撲選手権大会が同市で開催されるのと合わせて開催されるもので、相撲選手権大会では土の土俵が使われることになっており、新相撲も同じ土俵で行われる公算が強い。そのため、日本から出場が予定されている選手たちは、土の土俵で練習を重ねているが、やはり土

の土俵では小さな怪我や傷が絶えないようである。

この大会への参加国数も注目されるが、目下のところ、その数は明確になっていない。参加国数が16カ国を超えれば世界新相撲選手権大会とし、それ以下ならば、新相撲の国際大会という名称になるようである。

## VI 新相撲の課題

### 1. 普及

新相撲連盟の発足を前にして、関係者は新相撲の普及についてひとつの懸念を抱いていた。それは、柔道でも本家本元を外国勢に奪われるような状況となっているが、新相撲では、そのスタートから本家本元を外国勢に奪われてしまわないかという懸念だった。

「ヨーロッパではこの女子相撲を察知し、新相撲連盟はいつ興すのかという質問が多くきております。これを海外に呼びかけると日本より早く普及するのではないかと思います。

そして男子より女子の方が早く普及する懸念があります。だから今はそれを抑えているわけです。

基本的には日本でもまだ新相撲連盟を興していないのに、これを外国と同時に興した場合、外国では柔道をやったり、レスリングをやっている選手がたくさんいます。特にヨーロッパは武道の盛んなところですから普及の仕方も早いと思います。

まず、本家本元がしっかりした基盤を作り、ある程度選手や審判員を養成してからでないと世界へ発表することはできません。あと2～3年はかかるでしょう。

相撲は男のスポーツだという先入観が国民の間にあるので、こうした意識を少しずつ改革しながら全国的に展開し、組織がしっかりとできたところで新相撲連盟という形で世界に打って出たいと考えております」

(日本相撲連盟「平成8年度事業計画」の報告)

この報告の中で「(連盟の発足は)あと2～3年はかかるでしょう」といっているが、平成8年4月に日本新相撲連盟が発足したことを考えると、いわば見切り発車の形だったといえるかもしれない。しかし、オリンピックへの参加という目標のためには、やむを得ないことでもあった。

今後急がれるのは、新相撲の普及・拡大である。

新相撲連盟発足当初、新相撲人口について、田中英寿日本相撲連盟常務理事は、「底辺は広いから1000人ぐらいつぐ集まる」

と語っていたが、まだその半分にも達していないのが現状である。

オリンピックの新種目に新相撲が採用されれば、新相撲が急速に普及することは間違いないが、これは本末転倒で、あくまでも新相撲を含めたアマチュア相撲の普及の結果が、オリンピックへの参加につながると考えるべきである。しかも、最悪の場合は、2008年のオリンピックへの参加が実現しないこともありうる。そうなった場合、オリンピック頼りの普及では、長期にわたって知恵と努力を重ねて準備してきた新相撲も、あだ花になりかねない。

新相撲連盟では今後、

「小中学生への普及を進めていく」

としているが、確かにちびっ子相撲では、男の子にまじって女の子の参加も多いので、すぐに成果が見られないが、こうした地道な努力は大切なことと思われる。

相撲はルールも簡単で、その気になれば飛び入りで対戦することも可能である。小学生のような女の子なら、恥ずかしさよりも土俵に上がって楽しみたいという気持ちが勝ったとしても、不思議なことではない。

山形県は女子相撲が伝統的に盛んだったためか、すでに新相撲の県大会が開かれており、平成10年11月の大会には70人が参加したが、このうち62人が小学生だった。

この山形県の例は、ちびっ子相撲などで相撲競技の楽しさを味わった女の子が、中学以降も相撲



図5 インターネット・ホームページ例

を取りつづける環境作りの重要性を物語っている。

国体への参加は近々実現することになるだろうが、これが実現すれば、県大会などの予選が行われることになり、一気に底辺の拡大が期待される。また国体への参加は、ちびっ子相撲から相撲を始めた女の子が、中学・高校へと進学しても相撲を続ける上で、大きな励みとなり、よい目標となるだろう。

また、普及に大きな力を発揮するのがマスコミである。マスコミでもつねに新しい話題を探しており、新相撲の発足時に多くの新聞などが取り上げたのは、すでに見たとおりである。今後もマスコミにアピールするような試合運営や話題づくりを心がけていくことも必要であろう。

マスコミの中でもテレビの宣伝力は絶大なものがあり、どんなに言葉を尽しても、短時間でもテレビに映される浸透力にはかなわない。テレビといっても最近はいろいろな形態があり、全国ネットのテレビ局が無理ならば、ローカルテレビ局、さらには有線テレビやインターネットを利用した中継を利用することも可能な時代となっている。(図5) さまざまな状況に応じて、それらの有効活用を図っていくことが望まれる。

## 2. 服 装

新相撲の選手の服装は、女性の特性に配慮した“苦心作”であり、着用した選手にも好評である。しかし、この服装に問題がないわけではない。それは、服装をそろえようとする、およそ3万円もかかるという問題である。気軽に新相撲を始めようという女性にとって、これは大きな障害となるだろう。とくに学校のクラブで行う学生にとっては、頭の痛い問題である。相撲はもっとも素朴な格闘技のひとつであるが、それはルールだけでなく、服装についてもいえることである。つまり、まわしだけで行えるのが相撲なのである。もちろん、まわしだけで新相撲を行うわけにはいかないが、服装に多額の費用をかけていいわけでもない(表5)。

表5 主な競技の着衣の価格

競技種目	およその価格	備 考
新相撲	30000円	レオタードと相撲パンツ
相撲	9000円	まわし
女子柔道	10000円以下	
女子レスリング	20000円	シューズ込み
水泳	10000円	競泳用水着
ソフトボール	12000円	

新相撲連盟では、「練習には、グラップリングパンツのみを購入し、Tシャツ等と組み合わせて着用する」としているが、これはあくまでも練習上でのことである。普及すれば価格も下がることが期待できるが、これから普及をはかろうという現状では、競技会でも練習時と同じような服装で行えるように考えていくことも必要であろう。

これは私たちの学校の選手の感想であるが、新相撲の服装について、「最初は恥ずかしかったが、別に問題はなかった」と、恥ずかしさを感じたのは始めだけで、すぐに慣れたという。選手ばかりでなく見る側でも、多くの人がおそらくこれと同じ感想を持つことであろう。別の選手は、「女性の場合は慣れないので、まわしは嫌でしょうが、目が慣れてきたら、それがユニフォームとなるので、最初からまわしを着用するのが良い」との意見を述べている。海外では男性と同じようにまわしを巻いている選手が多いことを前項で紹介したが、日本でもそれを希望する選手がいることを付け加えておきたい。国際交流試合を活発に行い、その経験を踏まえて、競技のルールを見直すなど、柔軟に対応していく必要がありそうである。

### 3. 練習（稽古）

新相撲の練習は、四股や鉄砲など、従来の相撲とほとんど変わらない。柔道など他の競技から新相撲に入る人が多いが、他の競技と違って新相撲を含め相撲は前へ出るのが基本。そのため、女性にも相撲独特の練習が課せられるのは当然であるが、着衣やマットの土俵と同様、練習でも女子の特性に配慮した新相撲の練習方法が考案・工夫されることも必要になってこよう。男性の相撲でも最近では、筋力トレーニングやメンタルトレーニングなど、科学的トレーニングが取り入れられるようになってきているが、これらを参考にして工夫・改良を加えるのもいいだろう。

練習でもっとも気をつけなければならないのが、選手の怪我である。これも私たちの学校の選手の話であるが、「夢中になると怪我をするのが

心配」と、本音をもらす選手もいる。また、「力まかせにやったので、アザができたりすりきずをして大変だった」と、新相撲の嫌な点として、傷をつくったことを挙げる選手もいる。

男性ならば、場合によっては「少しくらいの傷や怪我を心配して、強くなれるか」と言ってしまうこともできるが、女性の場合はそういうわけにはいかない。

そのためには、日頃から怪我をしないトレーニング・体力づくりを行う必要がある。選手の不足から、他の競技の選手を借りてきて、にわか選手とすることもあるが、そのようなときは、とくに注意を払わなければならない。万一のことを考え、障害保険への加入もしておくべきであろう。

男性中心の稽古から生まれた、練習における用語の問題もある。女性が相撲を取ることに一番の抵抗を感じるのは、股を開くことだというのが、股を開くのは新相撲に限ったことではない。「股割」「腰割」などの練習用語があるため、相撲では特にそのことが強調されている嫌いがある。その他、練習時にも、選手の体の部位を具体的に指示できず困惑する男性の指導者もいる。新相撲という造語と同様、思い切った練習用語の工夫も必要になってくると思われる。

選手の立場に立つと、練習で一番困っているのが、練習相手がいないということである。試合に出場したものの、「試合まで他の選手と練習をしたことがなかった。これからは、もっと練習をして、新相撲の技術を自分のものにして、試合に臨みたい」という選手がいるほど、練習の機会が持ちにくいというのが現状である。「もっと練習をして、技術を上達させたい」（試合に参加した私たちの学校の選手）という選手たちの声に応えるため、新相撲連盟が支援して合同練習や合宿研修を実施するなど、一刻も早い環境づくりが望まれる。

### 4. 指導者

どのスポーツ競技においても指導者の役割は重



要だが、新相撲ではとりわけ指導者の役割には大きなものがある。今後の新相撲の普及のカギも、指導者が握っているといっていいたいだろう。新相撲の選手の多くが、指導者に勧められて、あるいは指導者に恵まれて新相撲を始めている。

新相撲連盟でも指導者の養成に力を入れており、相撲連盟に依頼して、定期的に講習会を開いている。さらに新しい試みとして、来年（平成12年）の第4回全日本新相撲選手権大会では、試合時間をこれまでより繰り下げ、午前中は指導者の講習会を開くことにしており、受講者には連盟の認定証も授与される。こうした講習会にできるだけ多くの人の受講が望まれる。

新相撲の指導者としてはまず、指導者自身が新相撲というものを十分に理解することが重要となる。<sup>2</sup>そのためには、指導者自身が新相撲の経験者であることがもっとも望ましいわけだが、発足間もないので、それを望むのは無理があるのもやむを得ない。現状では、相撲の指導者が新相撲の指導者を兼ねるといえる場合が多くなるだろう。

相撲の指導者であれば、相撲競技が我が国の伝統文化から生まれたもので、「礼」を基本としているということは、すでに心得ているはずである。また、強くなるばかりでなく、怪我をしないための稽古や心的な面でも強靱になるための、心身を共に鍛える相撲独特の稽古を身につけていることであろう。

新相撲でもルールはこれまでの相撲とまったく変わらないわけだから、指導は相撲と同様の指導を行えばいいことになる。肝心なのは、まず指導者として自ら厳しく鍛えていくという姿勢を持つことであろう。

そうは言っても、相撲の指導をそのまま新相撲に持ち込むだけで事足りるわけではない。新相撲の選手は女性であるから、とくに怪我の予防に注意を払うべきである。また、「国技としての相撲は、大相撲で伝承していただきたい」と新相撲連盟で言っているとおり、新しいスポーツとして、なによりもまず競技に重点を置き、新相撲を続け

ていきたいと思わせるような指導も必要となるだろう。実際の現場での指導でも、選手が男性の場合は通用しても、新相撲では気づかぬうちに選手を傷つけることもあり、通用しないこともあるだろう。指導には自信を持って行うことは当然だが、心のうちでは謙虚に反省する態度を身に付けておくことも欠かせない。

我が国では外国に比べると指導者の地位は低く見られがちだが、新相撲の普及・拡大のために、優秀な指導者には、新相撲連盟が物心両面で思い切った支援をしていくことも必要だろう。

また、新相撲連盟では、とくに女性を対象とした指導者講習会も開いているが、その成果が実り、多くの女性指導者の誕生が待たれるところである。

## 5. 審判

日本新相撲連盟では、公認審判員の種類として、国際大会では「国際A級審判員」と「国際B級審判員」、国内大会では「国内A級審判員」と「国内B級審判員」の、それぞれ2種類を設けている。その申請資格は、「満25歳以上であること」、「有段者（別に定める）であること」、「該当する連盟の、認定講習会を受講していること」などとなっている。

しかし、現状では、相撲連盟の審判員が新相撲の審判員を務めることがほとんどである。もちろん、新相撲は相撲とまったく同じルールで行われているのだから、こうしたことに不都合があるわけではないが、新相撲連盟でも独自に公認審判員を認定するようになってきているのだから、独自に認定した審判員による試合の実現が望まれる。新相撲連盟では、全日本新相撲選手権大会の審判員には、新相撲の特性を理解してもらうため、あらかじめ新相撲連盟にも登録してもらった上で審判を依頼しており、こうした配慮は十分評価できよう。

他の競技にない相撲の特徴の一つに、勝負の判定が誰にでもよくわかるという点が挙げられる。しかし、それだからといって、新相撲の審判は容

易だということにはならない。相撲はスピーディでダイナミックなのも特徴であるから、それに対応した判定をしなければならない。また、相撲は、選手の細かな身のこなしや呼吸が勝敗を分けるほど、土俵に上がり勝負を終えるまでの短時間の中に勝負の行方が凝縮されている。その凝縮された時間を取り仕切るのが審判であるから、他の競技以上に審判の力量が問われることにもなる。試合を経験した選手の中には、審判について、「各審判の間で考え方に違いがあった。もっとしっかりやってほしかった」という選手もいた。審判もまた、選手や観客に厳しく「審判されている」ことを肝に銘じるべきであろう。

また、女性審判員のもとで試合を経験した選手は、「初めて女子が審判をしたので、その点でプレッシャーを感じたが、これからも女性の場が増えると良いと思いました。女性にもできます」と話しており、選手にとっても同性の審判員を歓迎する声が出ている。女性の指導者と同様、新相撲連盟公認の女性の審判員がより多く誕生することが望まれる。

## おわりに

本稿の前半では、我が国の女相撲の歴史をたどった。その過程で、女相撲というだけで「きわ物」扱いしている書物のなんと多いことかと驚いたのであった。しかも、新しい書物ほどその程度がはなはだしい半面、資料的裏付けが乏しく、まさに「色眼鏡」で女相撲を見ているとしかいいようのないものがほとんどであった。

なにぶんこの分野の資料が少なく、また、私たちの力不足から、その論旨を十分展開・尽くすことができなかつたとの思いは残るが、江戸時代に女性力士が関を取って男性の相撲と同様の興行をした女相撲のあったことを、ひとまず強調しておきたい。

後半の新相撲では、その発足の経過と今後の課題を私たちなりにきちんと整理しておきたかっ

た。オリンピックの参加という直接的な理由があったにせよ、それまでには、長い準備期間と大勢の人たちの苦勞があり、また、それを後押しする時代的背景があったということ、多くの人に知ってもらいたかったからである。

オリンピックへの参加はともかく、花をつけたばかりの新相撲が決してあだ花に終わることなく、今後普及・発展することを心より願っている。多くの方々のご意見、ご批判を仰ぎたい。

## 引用・参考文献

- 1) 雄松比良彦：『女相撲史論』京都謫仙居 1963年・平井通『おんなすもう一見世物女角力志一』有光書房 1972・寒川恒夫編『相撲の宇宙論』109-140 金田英子「女相撲—もう一つの大相撲」平凡社、1993.
- 2) 日本古典文学大系第67『日本書紀・上』岩波書店、東京、1967.
- 3) 『義殘後覚』は文禄5年(1596)、愚軒が著したもの。原本にあたることができなかつたのでここでは、三木愛花 名著『相撲史伝』曙光社 1901年から転載した。また転載に際して現代仮名遣いとした。
- 4) 高柳真三・石井良助編『御触書寛保集成』、岩波書店 東京、1934.
- 5) 粕谷宏紀：『新編川柳大辞典』東京堂出版 1995.
- 6) 平井通：『おんなすもう一見世物女角力志一』有光書房、1972.
- 7) 中村幸彦：『上田秋成全集』9 中央公論社、東京、1992.
- 8) 中村幸彦校注 日本古典文学大系56『上田秋成集』補注401、岩波書店、東京、1959.
- 9) 石井良助編：『太政官日誌』第6巻 東京堂出版 東京、1981.
- 10) 1) 参照
- 11) 高橋秀雄編：『祭礼行事・長崎県』おうふう、1997.
- 12) 浅野建二編：『日本民謡大事典』雄山閣出版、1983.
- 13) 前出『相撲の宇宙論』の中で、金田英子氏は、普段行わない女相撲を神前で取ることによって逆に神の機嫌を損ね、その怒りが雨に結びつくと考えたと推測している。